しての「ヘビハラ僧」像が求められていると考えられる。

二つ目の変化は「ビハラ」という概念自体が「ビハラ萌芽期」より拡大してきているという点である。谷山「二〇〇五」によれば、現在「ビハラ」は三つの枠組み、すなわち「狭義」：仏教を基礎としたターミナルケア活動及びその施設、「広義」：老病死を対象とした、医療及び社会福祉領域での、仏教者による活動及びその施設、「最広義」：災害援助、青少年育成、文化事業など「いのち」を支える、または「いのち」についての思索の機会を提供する、仏教者を主体とした社会活動というように三つに拡大して捉えられている。これらに伴い「ビハラ萌芽期」よりも「ヘビハラ僧」像も拡大して考える必要性がある。今発表では谷山「二〇〇五」の「狭義」と「広義」を踏まえた「ヘビハラ僧」像の試論を述べた。すなわち筆者が想定するのは、医療現場だけでなく、福祉施設現場も視野にいたれた「狭義」及び「広義」の範囲でも活動する「ヘビハラ僧」像である。

医療・福祉現場における現代的な「ヘビハラ僧」の役割として『チャプレン白書』に記される十項目の役割を参考に、筆者自身が医療・福祉現場で「ヘビハラ僧」の経験を積みながら思考していたことと加味して、以下の四つの役割が「ヘビハラ僧」には必要であると考えられる。①基本的な姿勢、②宗教家としての役割、③スピリチュアルケア提供者としての役割、④医療・福祉におけるケアチームスタッフとしての役割の以上四点である。

「ビハラ萌芽期」には、「ヘビハラ僧」の役割は明確に定まっていた訳ではなかった。しかし、現代においては、上述したよ

うに医療界からのスピリチュアルケア提供者として求められる宗教家像や、「ビハラ」活動の福祉への拡大化という背景を踏まえて、以上の四点のようにある程度具体化させた上で、「ヘビハラ僧」自身が役割を認識して活動する必要があることを提唱した。

現代の「お迎え」現象と聖衆来迎

—— 仏を迎えるトレーニング ——

大村 哲夫

死に瀕した人は、他者には見えないさまざまなイメージを見ることが知られている。二〇〇三年から二〇〇七年に自宅等で死亡した六八二人の遺族対象の質問紙調査（東北在宅ホスピス研究会二〇〇七）によると、「他人には見えない人の存在や風景について語った」患者は全体の四二・三％にのぼる。このような現象は一般に「お迎え」として知られるものであるが、宗教学や民俗学の領域でこれまであまり研究の対象とされてはこず、臨死体験や臨床心理学の分野でその存在が指摘されてきたに過ぎない。

「お迎え」の語は歴史的に「御来迎」とほぼ同義に用いられ、阿弥陀仏が諸菩薩と共に念仏行者の臨終に出迎え極楽世界へ連れて行くことを指し、古代以来編まれてきた「往生伝」等にはその「実例」が枚挙に暇がない。しかし前述した現代の「お迎

第17部会

え」には、神仏が見えたケースは僅かに五・八%に過ぎず、最も多く見られたのは「すでに亡くなった家族や知り合い」で、五二・九%である。質問紙調査を実施した諸岡ら(二〇〇八)も「いったいいつから家族や友人がへお迎え」に来ることになったのか」と疑問を呈している。たしかに近世以前の文献上、これら「親しい死者」による「お迎え」の事例はほとんど見られず、仏菩薩の来迎ばかりと言っても過言ではない。ではどうして古人は仏菩薩が見えたのだろうか？なぜ現代人には仏菩薩が見えないのだろうか？発表者は、阿弥陀仏等による「聖衆来迎」を説いた浄土門の古典であり、同時代のみならず後世の死生観にも大きな影響を与えたとされる『往生要集』をテキストにこの問題への接近を試みた。

『往生要集』は源信が九八五年に著した念仏を勧める諸経典のアンソロジーであり、地獄等の詳細・凄惨な描写によって厭離穢土の念を起こさせ、極楽往生を希うように促し、念仏の作法を述べている。『往生要集』が引用する經典によると、念仏行者のもとに「聖衆来迎」があり極楽往生するとあるが、このことは仏菩薩の来迎が無ければ極楽へ行けず、死後もさまざまな苦を受けることになるということの意味する。そのため臨終期に阿弥陀の姿を見ることが強迫的な努力を要することになる。日常的には、阿弥陀仏の姿をその足下の蓮の花弁の脈の一々についてイメージし、仏の相好を確認し頭頂から足の裏までを繰返し想念する「念仏」やその名号を「称名」する行を行う。死が迫ったときは「臨終行儀」として特別な部屋に入り、仏像を安置しその手から病者の手へ紐でつなぎ、香を焚き

花を散らして荘厳し、自他の称名念仏の声を絶やさないようにする。すなわち「聖衆来迎」のイメージを具体的に表現し、病者の注意を「往生の想、花台の聖衆の来たりて迎接するの想」に集中させ、間違えなく聖衆来迎が得られるように環境整備が図られるのである。念仏修行とは、極楽往生という人生最大の目的のための具体的な「準備」、すなわち臨終にあたって阿弥陀仏の「お迎え」というイメージを見るためのトレーニングであるといつてよいだろう。

発表者は先に現代の「お迎え」現象において、臨死者が安心できる場合と不安を感じる場合があり、その背景には「お迎え」概念共有の有無があることを指摘した(二〇〇八)。現代の「お迎え」現象で神仏の出現が少なくなったことは、『往生要集』に示されたような浄土観の変化と念仏修行が行われなくなったことによると考えられる。また読売新聞の宗教観調査(二〇〇八)によると、「宗教を信じている」人は二六・一%に過ぎないが、「盆や彼岸にお墓参りに行く」人は七八・三%、「しばしば家の仏壇や神棚に手を合わせる」人は五〇・六%もいる。現代日本人は、親しい死者はなお「存在」するという感覚を「無自覚」に保持していることによって、「親しい死者」のイメージを見るのだと考えられる。